学校法人
鎌倉女子大学

柳原白蓮と私

「次のＮＨＫの朝ドラのヒロインは、村岡花子さんよ[※1]」、こんなニュースが聞こえてきて、私は「赤毛のアン」にはまっていた遠い少女時代を思い出して、毎朝楽しみに見ていました。

しばらくして、友人からこんな電話が。「今日から出ている蓮さま、あなたのお仲人の柳原白蓮のことよ。見ていますか[※2]」。突然のことで、よく理解できないままに２、３日が過ぎて、ようやく物語の筋がわかりました。

そうなんです、確かに。もう６０年以上前のことですが、白蓮先生ご夫妻の媒酌で、私は松本を名乗ることになったのです。

主人松本尚の母千枝子と白蓮先生とは、歌人佐佐木信綱[※3]を通じて、まさに腹心の友、目白のお宅で白蓮先生、千枝子義母を中心に女子会がしばしば開かれ、姉なみ子はその常連でした。時に話題は縁談に及び、千枝子は何度お見合いしても決まらない四男尚の嫁探しに孤軍奮闘だったことから、その苦労話をしたところ、姉が「妹も同じです。お見合いしても決まらなくて、母は泣いています」と。そこで、「あら、ちょうどいいじゃないの」、という白蓮さんの一言で、みんなで早速乾杯したとか。

ずいぶん簡単ないきさつと思われるでしょうが、私としては、苦しい戦争がすんでようやく自由の身になり、音楽のよき師、よき友、そしてボーイフレンドにも恵まれ、青春を謳歌する日々を送っているさなかでしたし、私にも意地があります。両親や姉の説得に反抗して、悩んだりすねたりしましたが、結局松本尚と結婚したわけです。

話は変わりますが、白蓮さんが九州の炭鉱王との結婚の条件の一つに、何れ女学校を創設することを望んでいたということは、テレビでも放映されたことですが、実現されることはなかったわけです。ですから、本学の前身京浜女子家政理学専門学校が昭和１８年に創設された折には、大いに関心を持たれ、大事な行事には必ず出席して、始終松本家を支えてくださいました。また、昭和２９年頃から旧松本講堂で講義の時間を持ってくださり、当時の卒業生に会う折などに、今でも気品の高いお姿が心に刻まれ、教えられた知識の断片は忘れても、その素晴らしいご人格は年月を越えて心に住み続けていると話してくれます。

来学の折には必ずわが家に立ち寄られ、早逝した千枝子の分まで子どもたちをかわいがってくださいました。

目白のお宅にはたびたび季節のご挨拶に伺いました。大正三美人の誉れ高く、やんごと

ない有名な女流歌人として、世間からは遠い存在と思われていたような方ですが、実は大変気さくな方で、私には何でも話してくださいました。晩年は目がご不自由になられ、お訪ねすると私の手を握ったままお話しを続けられ、おいとまする時を見つけるのに困ったこともあり、そんな折、白いお髭のご主人の龍介さんがお茶を持って来てくださり、このお二人があの激しい恋をなさったのかと、不思議な気がしたものです。

昭和４２年２月中頃お見舞いに伺った折は、既に昏睡状態でいらっしゃり、透き通るような美しいお顔を見て、激しい一人の女性の幕が下りるのだと、そっと枕元にお花を置いてお別れし、それから数日後訃報が届きました。

昭和４２年２月２２日没　俗名　柳原燁子　行年　８１歳

白蓮先生の１７回忌、宮崎龍介先生の１３回忌の法要が昭和５８年１月２９日東京白金台の「般若苑」で行われました。集まったのは親交の深かった方々ばかりで、その中で若い部類の私達夫婦がお招きいただいたのは、白蓮先生との浅からぬご縁のよしみによるものであろうと、あらためて感謝の祈りをささげました。

今となっては、全てが懐かしい思い出です。

※１　村岡花子（明治２６～昭和４３）

山梨県に生まれる。クリスチャン。児童文学者。ルーシー・モード・モンゴメリの『赤毛のアン』を初めオルコットやトウェインの翻訳者として知られる。

※２　柳原白蓮（明治１８～昭和４２）

大正天皇の従妹として、柳原伯爵家に生まれる。歌人。女性運動家。九州の炭鉱王との離縁、孫文の辛亥革命を支援した宮崎滔天の子息龍介氏との恋愛、そして結婚は、社会的事件としても有名。

※３　佐佐木信綱（明治５～昭和３８）

三重県に生まれる。歌人。与謝野鉄幹他と新しい詩作の会を起こす。貞明皇后初め皇族方に和歌を教え、国文学の世界の代表的指導者として活躍。第１回文化勲章受章者。

（学園主　松本　紀子）

＞前のページへ戻る